資料②

教育史学会　第６７回大会　開催のご案内

会員各位

皆様におかれましては、ますますご健勝のこととお慶び申し上げます。

本年の教育史学会第 67 回大会を、下記の要領で開催いたします。皆様のご参加を心よりお待ちしております。

1. 日程　2023 年 9 月 23 日(土)・24 日(日)

2. 会場　オンライン開催（北海道大学　札幌キャンパス）

※なお、シンポジウムについてのみ、北海道大学にて対面でも参加できます。

下記の大会ウェブページをプラットフォームとして、事前参加登録、研究発表／コロキウムの申し込み、大会プログラム、発表要綱集録、アクセス方法、ZOOM ミーティングのリンクなどを案内します。

https://jshse-taikai.jp/　（2023 年 5 月末開設予定）

3. タイムテーブル（予定）

9 月 23 日(土)

9:00	12:00	13:00	15:40	18:00
研究発表		研究発表	コロキウム	

9 月 24 日(日)

9:00	12:00	13:00	14:00	14:10	17:40
研究発表		総会		シンポジウム	

※各会場の ZOOM ミーティング入室開始時は **20 分前**です。司会･報告者は **10 分前まで**にご入室ください。ZOOM ミーティングの方式として、入室情報があってから参加を一人ひとり確認しますので、アクセス後、ミーティング出席までに時間がかかります。余裕をもってアクセスしてください。

4. 大会参加費

無料

5. 参加受付（事前参加登録）

会員／非会員ともに、発表の有無にかかわらず、すべての参加予定者に事前参加登録をお願いします。次の要領で大会ウェブページより事前参加登録いただいた後、参加者専用ページ（発表要綱集録、ZOOM ミーティングのリンクを掲載）にアクセスするための参加 ID とパスワードを電子メールで返信します。

（1）事前参加登録の期間・方法

登録期間　**8 月 10 日(木)～9 月 10 日(日)**

登録方法

大会ウェブページに開設予定の事前参加登録ページのフォームに入力してください。詳しくは、大会ウェブページでご案内する予定です。

登録内容

①氏名、②所属、③電子メールアドレス、④会員／非会員の区別、⑤参加を希望する部会の選択（研究発表／コロキウム／シンポジウムから選択）、⑥シンポジウムに参加する方法の選択（オンライン／対面から選択）。なお、登録いただいた個人情報は、大会運営に必要な連絡以外の目的に使用せず、大会終了後、適切に廃棄いたします。

（2）参加者専用ページへのアクセス

事前参加登録後、参加者専用ページへのアクセスに必要な参加 ID とパスワードを返信します。参加者専用ページでは、発表要綱集録、ZOOM ミーティングのリンク等、大会参加に必要な情報を閲覧できます。

なお、発行する参加 ID とパスワードは大会終了まで大事に保管してください。第三者には絶対に伝えないでください。最悪の場合、大会が悪意のある第三者に奪われて開催が不可能になります。

6. 研究発表の申し込みについて

（1）申し込み方法

大会ウェブページの「研究発表申し込み」フォームに必要事項を入力し、送信してください。フォーマットへの入力が難しい方は、大会準備委員会までお問い合わせください。

受付期間　6 月 1 日(木)～6 月 30 日(金)　※送信時刻が 6 月 30 日(金)23:59 まで有効。

〔大会ウェブページ〕	https://jshse-taikai.jp/
〔大会準備委員会メールアドレス〕	jshse67@edu.hokudai.ac.jp

（2）発表資格

一般会員：第 66 回大会年度（2022 年 9 月～2023 年 8 月）の会費を納入済みの者

新入会員：本年の 5 月末日までに入会の手続きを終え、第 66 回大会年度の会費を納入した者

（3）発表内容および発表時間

次頁の**「大会における研究発表およびコロキウム企画に関するガイドライン」**をご確認ください。

（4）受付確認

申し込みの際に登録・記入していただいたメールアドレス宛に、E-mail で受付確認の連絡をお送りします。申し込みより 1 週間を過ぎても連絡がない場合は、大会準備委員会にお問い合わせください。

（5）その他

申し込みをされた方には、**発表要綱集録掲載用の原稿（A4 判 2 枚）**を作成いただきます**（8 月 21 日（月）締切）**。様式は大会ウェブページからダウンロードして**電子提出**してください。

なお、8 月 10 日(木)～9 月 10 日(日)の間に**事前参加登録**を忘れないようにお願いします。参加 ID・パスワードが届かないおそれがございます。

7. コロキウムの申し込みについて

企画をご予定の方は、**6 月 1 日(木)から 6 月 30 日(金)まで**に、上記の研究発表と同様の方法でお申し込みください。なお、コロキウムにおける企画者や発表者や発表資格などについては、以下の**「大会における研究発表およびコロキウム企画に関するガイドライン」**をご確認ください。

申し込み完了の後、準備委員会から受付確認の連絡を E-mail でお送りします。申し込みより 1 週間を過ぎても連絡がない場合は、大会準備委員会にお問い合わせください。

申し込みをされた方には、**発表要綱集掲載用の原稿（A4 判 2 枚）**を作成いただきます**（8 月 21 日(月)締切）**。様式は大会ウェブページからダウンロードして**電子提出**してください。

なお、8 月 10 日(木)～9 月 10 日(日)の間に**事前参加登録**を忘れないようにお願いします。参加 ID・パスワードが届かないおそれがございます。

「大会における研究発表およびコロキウム企画に関するガイドライン」

1．同一の大会における同一の会員による研究発表は、1 件とする。ただし、個人での発表に加えて共同研究での発表に参加することは、1 件に限り可とする。

2．発表時間は 1 人あたり 30 分（研究発表 25 分、質疑応答 5 分）とする。複数の会員による研究発表は、申し出により、60 分（研究発表 50 分、質疑応答 10 分）とすることができる。

3. 研究発表は未発表のものに限る。「未発表のもの」とは、論文として発表していないもの、および他の学会等（学会名称でない日本学術会議協力学術研究団体に加盟している団体を含む）の大会で口頭発表していないものをいう。ただし、未刊行で、自大学のウェブでも未公開の学位論文中の未発表部分は、未発表の研究とみなす。

4．コロキウムの企画者は、会員に限る。

5．コロキウムにおける発表者（報告者、指定討論者等）に非会員を含めることは可とする。ただし、当該非会員は、大会の参加にあたって臨時会員となるものとする。

6．コロキウムにおける発表者は、複数人とする。

7．発表資格者は、大会が開催される年の 5 月末までにその年度の会費を納入している者とする。会費未納の会員は、研究発表およびコロキウムの企画を申し込むことができない。

8. シンポジウムについて

日　時	**9 月 24 日（日）14:10～17:40**
テーマ	**アイヌ教育史研究の現在　――研究の有効性を不断に問う**
報告者	小川正人（北海道博物館）
	谷本晃久（北海道大学）
	新井かおり（北海道大学）
	北原モコットゥナシ（北海道大学）
指定討論者	冨山一郎（同志社大学）
	藤野裕子（早稲田大学）
司会者	古川宣子（大東文化大学）
	北村嘉恵（北海道大学）

趣　旨

アイヌ教育史研究は、アイヌ民族の、あるいはアイヌ民族をとりまいてきた社会の、歴史と現在に対して、どのような有効性がある／あり得るのか。現在のこの社会のなかで、アイヌ教育史研究が有効性を持ち得るために、どのような視点や課題を意識するべきか。この問いは、アイヌ教育史研究（者）が、現実社会のなかで何を課題として受け止め、追求すべき問題とそれに向かう回路を見定めてきたのか、そして、いかなる歴史叙述や歴史展示を社会に投げ返してきたのか、それらを不断に省察し、浮かび上がる課題や視座を確かめることを求めるものだ。そしてこの問いは、〈アイヌ教育史〉だけではなく、ひろく教育史研究（者）や社会科学（者）に共通するはずだ。――本シンポジウムでは、このような問いを起点として、研究者自らが、

自身の設定した対象や課題、そこで意識的・無意識的に前提としてきたことがらを改めて吟味する場を設定し、そこから教育史研究の有効性を考えるという課題に取り組んでみたい。

従って本シンポジウムを企画した意図は、教育史学に固有の存在理由や社会的な有用性を確認することではなく、○○研究の意義を問うプロセスそのものを個別具体的な蓄積＝状況に即して考えることにある。

アイヌ教育史研究に即してこの課題に取り組もうとするのは、本年度の大会開催校の所在地が北海道であるという現実と深く関わる。アイヌ民族・先住民族をとりまく近年の社会的・世界的情勢とも無縁ではありえないだろう。本シンポジウムの場を、いったんこのように押さえたうえで、さらに、「北海道だからアイヌの問題を取り上げる」という発想や、「マイノリティへの着目／からの視点」といった問題認識のありようもまた、討議を通じて省察の対象になるだろう。それゆえ、「周縁とされる地点から主流や全体を照射する」といったことは、本企画のねらいではないことをあらかじめ確認しておきたい。また、タイトルに掲げた「アイヌ教育史研究の現在」とは、研究史や近年の研究状況のレビューを意図したものではなく（もちろん、それらを踏まえることにはなるが）、研究そのものの積み重ねと立ち位置の省察が本シンポジウムの出発点であることを含意している。

以上のような企図のもと、まず基調報告として、小川正人会員（北海道博物館）に、自らの研究や教育史学会の取り組みを踏まえた問題提起をしていただく。そのうえで、近世蝦夷地（ここでは、敢えて当時の和人社会の地理的区分である「蝦夷地」を用いる）の地理的広がりのなかでアイヌ社会・和人社会の分厚い歴史実証研究を積み重ねてこられた谷本晃久さん、アイヌが主体となる歴史叙述への問いを貝澤正という個人の歩みに即して追究されている新井かおりさん、近現代アイヌ文化に関する発信や教育研究環境の改変に多面的に取り組んでおられる北原モコットゥナシさんの３名（いずれも北海道大学）に登壇いただき、それぞれの立場からアイヌ教育史研究の対象や視座を問い直す報告をお願いする。指定討論者としては、沖縄近現代史研究を起点として現実社会から発せられる問いを鋭敏に受け止め言葉を紡ぎ出してこられた冨山一郎さん（同志社大学）、民衆史研究の視点と方法を鋭く問い直しながら言葉で自らを表現しなかった人びとをいかに叙述しうるかを考え続ける藤野裕子さん（早稲田大学）に加わっていただく。お二人のコメントを糸口として、さらに参加される方々との討論へと進みたい。

9．その他

（1）大会プログラムは 8 月初旬に、発表要綱集録は 9 月中旬に大会ウェブページ上で公開します。本大会では大会プログラム及び発表要綱集録の冊子体は作成しません。いずれも大会ウェブページから各自で閲覧・ダウンロードしてください。閲覧・ダウンロードができない会員は、大会準備委員会にご相談ください。

（2）コロナウイルスの感染状況等により、大会の準備・運営に急な変更が生じた場合は、大会ウェブページにてご連絡します。

（3）不明な点がございましたら、大会準備委員会までご連絡ください。

教育史学会　第 67 回大会準備委員会
近藤健一郎（委員長）　白水浩信（事務局）　北村嘉恵　崎田嘉寛
〒060－0811 札幌市北区北 11 条西 7 丁目
北海道大学　大学院教育学研究院　白水研究室　気付
E-mail　jshse67@edu.hokudai.ac.jp
大会ウェブページ　https://jshse-taikai.jp/

資料③

教育史学会

第 67 回大会プログラム

2023年9月23日（土）－24日（日）

教育史学会　第６７回大会　参加のご案内

皆様におかれましては、ますますご健勝のこととお慶び申し上げます。このたび、教育史学会第 67 回大会を下記の要領で開催することになりました。ご参加を心よりお待ちしております。

１　日程　2023 年 9 月 23 日（土）・24 日（日）

２　会場　オンライン開催（北海道大学・札幌キャンパス）

下記の大会ウェブページをプラットフォームとして、事前参加登録、研究発表／コロキウムの申し込み、大会プログラム、発表要綱集録、アクセス方法、ZOOM ミーティングのリンクなどを案内します。

https://jshse-taikai.jp/

シンポジウムについてのみ、札幌キャンパス・文系共同講義棟・8 番教室（2 階）にて、対面で参加できます。なお、札幌キャンパスでは、設備の関係もあり、オンライン参加のための部屋をご用意しておりません。分科会・コロキウムに参加する環境は各自で確保してください。

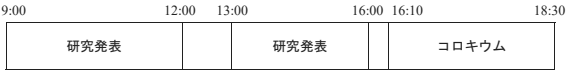
（札幌キャンパス会場へのアクセス方法）

- 札幌キャンパス正門は、JR 札幌駅北口より徒歩約 7 分です。
- 文系共同講義棟は、法学部棟と文学部棟の間にあります。
- 北海道大学ホームページのキャンパスマップもご参照ください。

https://www.hokudai.ac.jp/introduction/campus/campusmap/

3　タイムテーブル

9 月 23 日（土）



9 月 24 日（日）

※　各会場の ZOOM ミーティング入室開始は **20 分前**です。司会・報告者は **10 分前まで**に入室してください。ZOOM ミーティングの方式として、入室情報があってから参加を一人ひとり確認しますので、アクセス後、ミーティング出席までに時間がかかります。余裕をもってアクセスしてください。

4　大会参加費　　無料

5　参加受付（事前参加登録）

会員／非会員ともに、発表の有無にかかわらず、すべての参加予定者に事前参加登録をお願いします。次の要領で大会ウェブページより事前参加登録いただいた後、参加者専用ページ（発表要綱集録、ZOOM ミーティング、配付資料のダウンロード先のリンクを掲載）にアクセスするための参加 ID とパスワードを電子メールで返信します。

（1）事前参加登録の期間・方法

登録期間　2023 年 8 月 10 日（木）～9 月 10 日（日）

登録方法　大会ウェブページにアクセスし、事前参加登録ページのフォームに入力してください。

登録内容　①氏名、②所属、③電子メールアドレス、④会員／非会員の区別、⑤参加を希望する部会の選択（研究発表／コロキウム／シンポジウムから選択）、⑥シンポジウムに参加する方法の選択（オンライン／対面から選択）。なお、登録いただいた個人情報は、大会運営に必要な連絡以外の目的に使用せず、大会終了後、適切に廃棄いたします。

（2）参加者専用ページへのアクセス

事前参加登録後、参加者専用ページへのアクセスに必要な参加 ID とパスワードを電子メールでお知らせします。参加者専用ページでは、発表要綱集録、ZOOM ミーティングのリンク等、大会参加に必要な情報を閲覧できます。

なお、発行する参加 ID とパスワードは大会終了まで大事に保管してください。第三者には絶対に伝えないでください。最悪の場合、大会が悪意のある第三者に奪われて開催が不可能になります。

6　研究発表・コロキウム

各会場の ZOOM のミーティング入室開始は **20 分前**です。司会者・報告者は **10 分前**までに入室してください。

（1）研究発表について

① 発表時間は 30 分（発表 25 分、質疑応答 5 分）です。複数の会員による研究発表は、申し出により、 60 分（発表 50 分、質疑応答 10 分）です。

② 発表内容は未発表のものに限ります。「未発表のもの」とは、論文として発表していないもの、および他の学会等（学会名称でない日本学術会議協力学術研究団体に加盟している団体を含む）の大会で口頭発表していないものをいいます。ただし、未刊行で、自大学のウェブでも未公開の学位論文中の未発表部分は、未発表の研究とみなします。

③ 指定された分科会の開始時刻（9:00 または 13:00）までにご入室ください。遅刻した場合、本大会での発表資格を失います。当該分科会の発表順序は変更しません。発表予定者が欠席した場合も同様です。

④ 配付資料は、発表予定者の判断によりご準備ください。発表予定者には配付資料のアップロード方法をお知らせします。分科会参加者は、大会ウェブページの「参加者専用ページ」より、配付資料をダウンロードできます（公開開始は 9 月 22 日夜）。

（2）コロキウムについて

① コロキウム企画の進行については、企画者にお任せいたします。

② 配付資料は、企画者の判断によりご準備ください。企画者には配付資料のアップロード方法をお知らせします。コロキウム参加者は、大会ウェブページの「参加者専用ページ」より、配付資料をダウンロードできます（公開開始は 9 月 22 日夜）。

7　総会・研究奨励賞授与式

9 月 24 日（日）13:00 より開始します。会員の方はご出席をお願いいたします。ZOOM ミーティングの入室開始は **20 分前**です。関係者は **10 分前**までに入室してください。

8　シンポジウムについて

9 月 24 日（日）14:10 より開始します。ZOOM ウェビナーの入室開始は **20 分前**です。

9　問い合わせ先

教育史学会　第 67 回大会準備委員会　事務局
〒060-0811 札幌市北区北 11 条西 7 丁目
北海道大学　大学院教育学研究院　白水研究室　気付
E-mail　jshse67[at]edu.hokudai.ac.jp　※[at]を@に置き換えてください。

教育史学会第 67 回大会準備委員会
委員長　近藤健一郎
事務局　白水浩信
委　員　北村嘉恵　崎田嘉寛

大会 第 1 日目

9 月 23 日（土）

研究発表

9 月 23 日（土）午前　研究発表

第１分科会

司会：坂本 紀子（聖徳大学）・山本 和行（天理大学）

［1］　9:00　学制期の小学校及び戦後当初の新制中学校の特徴

林 一夫（元明星大学）

［2］　9:30　地方官からみた教育令の実施とその課題

湯川 嘉津美（上智大学）

［3］　10:00　明治 10～20 年代における普通教育と職業教育

湯川 文彦（お茶の水女子大学）

［4］　10:30　日本植民地期台湾における西螺廖家の就学行動
—「田舎ニ不相応ナル向学心」の由来と行方—

張 彩薇（京都大学（院））

［5］　11:00　19 世紀末ナイジェリアにおけるアフリカ人聖職者の教育活動に関する一考察

太田 淳平（広島大学（院））

＜総合討論＞11:30～12:00

第２分科会

司会：江口 潔（九州大学）・三上 敦史（早稲田大学）

［6］　9:00　中川謙二郎の工業教育への業績

小島 浩治（横浜市立生麦中学校）

［7］　9:30　近代日本の獣医養成教育
—札幌農学校と駒場農学校の比較から—

熊澤 恵里子（東京農業大学）

［8］　10:00　看護史学のメタヒストリー
—看護教育における「資源」としての「看護史」—

木野 涼介（京都大学（院））

［9］　10:30　旧大名華族家による旧制中学校運営
—土佐山内家と海南学校を事例に—

高岡 萌（福井県立こども歴史文化館）

［10］　11:00　1880-90 年代における宗教系私立学校と公教育制度の関係
—徴兵猶予の特典付与を巡る交渉—

髙瀬 航平（東京大学（院））

＜総合討論＞11:30～12:00

9月23日（土）午前　研究発表

第３分科会

司会：柏木 敦（立教大学）・奈須 恵子（立教大学）

［11］　9:00　「文検修身科」試験委員としての井上哲次郎の研究

蓑毛 智樹（神戸大学（院））

［12］　9:30　明治末期の小学校における試験の在り方論とその特質

橋本 昭彦（日本女子大学）

［13］　10:00　大正期における東京女子高等師範学校附属小学校の考査研究
—研究教授への導入に着目して—

遠座 知恵（東京学芸大学）

［14］　10:30　明治後期から昭和初期における日本語のローマ字表記法の対立
—義務教育へローマ字学習導入の議論への影響—

益田 かな子（神戸女子大学（院））

［15］　11:00　務台理作における日本文化論の検討
—西田幾多郎（1940）『日本文化の問題』に関する講演録を手がかりに—

金井 徹（東北福祉大学）

＜総合討論＞11:30～12:00

9 月 23 日（土）午後　研究発表

第４分科会

司会：田中 智子（京都大学）・宮本 健市郎（関西学院大学）

［16］　13:00　「人種改良」にみる身体の教育

新藤 康太（北海道大学（院））

［17］　13:30　雑誌『明義』からみる「官僚派」の国民養成
—政党政治実現のための「臣民」教育—

鴨志田 純花（お茶の水女子大学（院））

［18］　14:00　デューイの教育哲学と共産党教育理念の関係の再考

劉 幸（広島大学）

［19］　14:30　1930 年代米国におけるヴァージニア・プランのアフリカ系アメリカ人生徒への導入過程

斉藤 仁一朗（東海大学）

［20］　15:00　戦後新教育期における梅根悟のカリキュラム論
—愛知学芸大学愛知第一師範学校春日井附属小学校の実践に着目して—

加藤 優汰（神戸大学（院））

＜総合討論＞15:30〜16:00

第５分科会

司会：坂内 夏子（早稲田大学）・吉川 卓治（名古屋大学）

［21］　13:00　旧制中学校における討論会活動

熊谷 芳郎（聖学院大学）

［22］　13:30　大正期の宮城県における校外生活統制の展開
—教師による娯楽統制への傾斜の過程—

難波 知希（東京大学（院）・日本学術振興会特別研究員）

［23］　14:00　大正〜昭和戦前期における逓信省の社会教育的活動

水谷 有里（お茶の水女子大学（院））

［24］　14:30　学校放送揺籃期におけるラジオによる教育可能性の探究
—1930〜40 年代の放送教育論と心理学—

佐藤 洋希（九州大学（院））

＜総合討論＞15:00〜15:30

9 月 23 日（土）午後　研究発表

第６分科会

司会：野々村 淑子（九州大学）・山岸 利次（長崎大学）

［25］　13:00　ルネサンス期人文主義の教育論における体罰

井上 滉人（北海道大学（院））

［26］　13:30　フランス 18 世紀前半における学校教育論の新潮流
—キリスト教学校とパリ大学のコレージュから—

越水 雄二（同志社大学）

［27］　14:00　フランスの礼儀作法書史におけるモンヴェル『子どものための正しい作法』(1887) の位置づけ

井岡 瑞日（大阪総合保育大学）

［28］　14:30　20 世紀子どもの権利史における E.Jebb, K.N.Ventseli, 並びに J.Korczak の位置
—M.リーベル『下からの子どもの権利』を参照しながら—

塚本 智宏（札幌国際大学）

＜総合討論＞15:00～15:30

大会 第 1 日目

9 月 23 日（土）

コロキウム

コロキウム１

9 月 23 日（土）16:10 ～ 18:30

公教育の世俗化と宗派的多元性

企画・司会　岩下 誠（青山学院大学）
報告者　渡邊 昭子（大阪教育大学(非常勤)）
中村 好甫（広島大学(院)）
白尾 安紗美（東京大学(院)）
コメンテイタ　前田 更子（明治大学）

概要

かつて公教育制度のメルクマールとされた原則のなかに、「無償」「義務」と並んで「世俗」という基準が設定されたように、近現代世界における公教育制度の成立と展開は、宗教的な要素の制限や縮小の過程として描かれてきた。しかし、実際の「世俗化」は、こうした動きがいち早く進んだヨーロッパにおいても一様ではなかった。例えば、カリキュラムにおける宗教教育の位置づけや、私立（教会）学校への公費補助（というよりも、私立（教会）学校を公費助成と公的統制を組み合わせて公教育システムに包摂するかどうか）の有無に関して、各地域の「世俗化」には程度というよりも質的なバリエーションが存在するのであり、比較的厳格な聖俗分離を行ったフランスの事例を単一の「世俗化」モデルとしてそこからの距離に応じて世俗化の程度が測られるわけではない。そしてこうした差異が経路依存性によって現在の各地域における公教育制度に影響を与え、対立や葛藤を形成することも稀ではない。公共圏をめぐって宗教問題が再び重要な問題として争点化されるようになったポスト世俗化時代である現在、公教育において宗教がどのように取り扱われてきたのかを歴史的に再検討することは、独自の位相とアクチュアルな意義を持つであろう。

本コロキウムでは、聖俗分離とは異なるもうひとつの公教育の「世俗化」のルートを宗派的多元性として設定し、19 世紀後半から 20 世紀初頭における複数地域の事例を比較・検討することによって、（公）教育の世俗化とは何だったのかを改めて考えることにしたい。具体的には、二重君主国期におけるハンガリー、前世紀転換点にかけてのイギリス、戦間期を中心とするアルザス＝モゼル（フランス）に関する三つの報告と、それを受けてフランス史の立場からなされるコメントによって、コロキウムを構成する。

コロキウム２

9 月 23 日（土）16:10 ～ 18:30

戦後の地域における教育研究活動の諸相
――東京・群馬・埼玉の事例から考える――

オルガナイザー　須田 将司（学習院大学）
報告者　清水 禎文（宮城学院女子大学）
佐藤 高樹（帝京大学）
山田 恵吾（埼玉大学）

概要

本コロキウムは梶山雅史主宰の「教育情報回路としての教育会に関する総合的研究会」が 2004 年 7 月から継続させてきた共同研究の延長上に位置し、コロキウム企画として 19 回目となる。

これまで本研究会では、教育会の官府性のみならず、そこに集う者たちが日々の教育実践や地域の現実的な教育要求に直面して、切実さをもって活動していた側面を捉えてきた。3 冊の研究書や複数の科研報告書で解明を目指してきた対象は、明治初年の学制期から昭和戦後の教育会の解散や再出発と裾野を広げてきた。今回は、教組教研、教員サークル、民間研といった姿に焦点を当てる。

本研究会が議論を重ねてきた上述のような研究視座の延長上に、占領期から 1950 年代までの教育研究活動の動向を据えた際に、戦前からのいかなる変容・変質が捉えられるのか。また、どのような特徴や時期区分などが浮かび上がってくるのか。以下の３事例を手掛かりに考えてみたい。

・清水報告「戦後初期の地方における教育研究と教育研究団体―GHQ 資料の再検討―」

戦後初期に各地でカリキュラム開発が活発化した時期（おおむね 1947～1951 年）、民間主体の自発的な研究開発が行われる一方で、師範学校中心の実験校方式が採用された地域が少なくない。教育会は存廃の危機に直面し、教員組合は文化的活動を掲げつつ十分な対応ができなかった。今報告では、ＧＨＱ資料から教育研究団体に関する文書を再検討し、教育研究の実態と質について問い直したい。

・佐藤報告「1950 年代における教員の教育研究活動をめぐる動向と協調・対立の様相
――東京都を事例に――」

1950 年代の東京都を対象として、教員の教育研究活動の動向を考察する。各区・市部の「教育研究会」の活動に対し、都教組による都教研や、民間教育研究運動が採用した教育研究のスタンスや活動の実際を機関誌等の情報をもとに摘出し、重ね合わせることで、教員の問題意識、教職観形成を水路づけたであろう教育研究・現職研修の機能を読みとくための手がかりを探っていく。

・山田報告「1950 年代における教育研究サークルの展開（2）–土合教師の会（埼玉県旧浦和市）を中心に–」

1954 年に埼玉県旧土合村に誕生した、土合教師の会の活動内容とその思想、教育研究の実態を明らかにする。同じ時期に同地区で始められた西堀青年学級（大田堯・ロハ台）との関係、土合教師の会が県内のサークルに与えた影響などサークルとしての特質について、個々の参加者の動きをおさえながら検討する。

大会 第 2 日目

9 月 24 日（日）

研究発表

9 月 24 日（日）午前　研究発表

第７分科会

司会：新保 敦子（早稲田大学）・森岡 伸枝（大阪芸術大学）

［29］　9:00　河原操子の「入蒙」をめぐる真相

劉 迎春（京都大学（研修員））

［30］　9:30　奈良女子高等師範学校における千葉命吉の教育実践研究

橋本 美保（東京学芸大学）

［31］　10:00　戦前・戦中期の長野県における女性教員会の活動と組織化

齋藤 慶子（日本女子大学）

［32］　10:30　昭和初期の地域社会における女性と「修養」
—六浦荘女子修養会での小学校教師・長島重三郎を手がかりに—

真辺 駿（明治学院大学（非常勤））

［33］　11:00　中華人民共和国初期における女子教育
—1949～1961 年の「婦女幹部学校」を中心に—

許 逸菲（京都大学（院））

＜総合討論＞11:30～12:00

第８分科会

司会：大矢 一人（藤女子大学）・米田 俊彦（お茶の水女子大学）

［34］　9:00　占領期における「労働者教育」の基礎的研究
—政策と実態—

奥村 旅人（同志社大学（研究員））

［35］　9:30　占領期日本における教科外活動の課程化と学校管理
—『中学校・高等学校 管理の手引』の成立過程と内容を中心に—

猪股 大輝（東京大学（院））

［36］　10:00　「教師の倫理綱領」の書き換え（1961 年）について

広田 照幸（日本大学）

［37］　10:30　1967 年から 1971 年の中央教育審議会における幼児教育拡充に向けた議論とその背景

藤谷 未央（お茶の水女子大学（院）・日本学術振興会特別研究員）

［38］　11:00　『日本の教育史学』における著者の出現分布と研究論文の主題分析

松井 健人（東洋大学）

＜総合討論＞11:30～12:00

9 月 24 日（日）午前　研究発表

第９分科会

司会：小澤（内山）由理（共立女子大学）・鳥居 和代（金沢大学）

［39］　9:00　奥田三郎「卒業生のゆくえ」調査の検討

二井 仁美（奈良女子大学）

［40］　9:30　松田道雄の教育思想
—町医者と学校ぎらいの子どもたち—

水谷 千景（京都大学（院））

［41］　10:00　戦後台湾における奨学金

山田 美香（名古屋市立大学）

［42］　10:30　日本における教育福祉実践とスクールソーシャルワーク
—「越境」からの考察—

大崎 広行（武蔵野大学）

［43］　11:00　「義務教育未修了者」とは誰か
—2020 年国勢調査における最終学歴調査結果の分析を中心に—

江口 怜（摂南大学）

＜総合討論＞11:30～12:00

大会 第 2 日目

9 月 24 日（日）

シンポジウム

シンポジウム

9 月 24 日（日）14:10 ～ 17:40

アイヌ教育史研究の現在　――研究の有効性を不断に問う

基調報告　小川 正人（北海道博物館）
報告　谷本 晃久（北海道大学）
新井 かおり（北海道大学）
北原 モコットゥナシ（北海道大学）
指定討論　冨山 一郎（同志社大学）
藤野 裕子（早稲田大学）
司会　古川 宣子（大東文化大学）
北村 嘉恵（北海道大学）

趣　旨

アイヌ教育史研究は、アイヌ民族の、あるいはアイヌ民族をとりまいてきた社会の、歴史と現在に対して、どのような有効性がある／あり得るのか。現在のこの社会のなかで、アイヌ教育史研究が有効性を持ち得るために、どのような視点や課題を意識するべきか。この問いは、アイヌ教育史研究（者）が、現実社会のなかで何を課題として受け止め、追求すべき問題とそれに向かう回路を見定めてきたのか、そして、いかなる歴史叙述や歴史展示を社会に投げ返してきたのか、それらを不断に省察し、浮かび上がる課題や視座を確かめることを求めるものだ。そしてこの問いは、〈アイヌ教育史〉だけではなく、ひろく教育史研究（者）、社会科学（者）に共通するはずだ。――本シンポジウムでは、このような問いを起点として、研究者自らが、自身の設定した対象や課題、そこで意識的・無意識的に前提としてきたことがらを改めて吟味する場を設定し、そこから教育史研究の有効性を考えるという課題に取り組んでみたい。

したがって本シンポジウムを企画した意図は、教育史学に固有の存在理由や社会的な有用性を確認することではなく、○○研究の意義を問うプロセスそのものを個別具体的な蓄積＝状況に即して考えることにある。

アイヌ教育史研究に即してこの課題に取り組もうとするのは、本年度の大会開催校の所在地が北海道であるという現実と深く関わる。アイヌ民族・先住民族をとりまく近年の社会的・世界的情勢とも無縁ではありえないだろう。本シンポジウムの場を、いったんこのように押さえたうえで、さらに、「北海道だからアイヌの問題を取り上げる」という発想や、「マイノリティへの着目／からの視点」といった問題認識のありようもまた、本シンポジウムの討議を通じて省察の対象になるだろう。したがって、「周縁とされる地点から主流や全体を照射する」といったことは、本企画のねらいではないことをあらかじめ確認しておきたい。また、シンポジウムのタイトルに掲げた「アイヌ教育史研究の現在」とは、研究史や近年の研究状況のレビューを意図したものではなく（もちろん、それらをふまえることにはなるが）、研究そのものの積み重ねと立ち位置の省察が本シンポジウムの出発点であることを含意している。

以上のような企図のもと、まず基調報告として、小川正人会員に自らの研究や教育史学会の取り組みをふまえた問題提起をしていただく。そのうえで、谷本晃久さん、新井かおりさん、北原モコットゥナシさんの３名に登壇いただき、それぞれの立場からアイヌ教育史研究の対象や課題の問い直し、アイヌ史の多様なすがたなどを考える報告をお願いする。それらをふまえて研究の有効性を考えるコメントを冨山一郎さんおよび藤野裕子さんに行っていただき、さらに参加される方々との討論につなげていきたい。

主な報告関連文献

小川正人

「学校ができ、そこに子どもが通う　――近代アイヌ教育政策史における学校の問題」（『歴史学研究』833、2007 年 10 月）

谷本晃久

「蝦夷通詞・上原熊次郎の江戸　――御書物同心への異動と天文方出役をめぐって」（『北海道大学文学研究科紀要』151、2017 年 2 月）

『近世蝦夷地在地社会の研究』（山川出版社、2020 年）

新井かおり

「アイヌ近現代史の諸断層　――貝沢正の未発表原稿に見る幼年期の記憶を中心に」（『語りの地平　ライフストーリー研究』2、2017 年）

「「アイヌ側から見たアイヌ史」はいかに不／可能か　――貝沢正資料からみる各アイヌ史の編纂について」（『アイヌ・先住民研究』1、2021 年 3 月）

北原モコットゥナシ

『つないでほどく アイヌ／和人』（北海道大学アイヌ・先住民研究センター、2022 年）

「歴史的トラウマ概念のアイヌ研究への導入を探る」（『アイヌ・先住民研究』１、2021 年 3 月）

教育史学会第 67 回大会プログラム

2023 年 8 月 10 日発行

［発行］教育史学会第 67 回大会準備委員会
〒060-0811 札幌市北区北 11 条西 7 丁目
北海道大学大学院教育学研究院　白水研究室気付
E-mail　jshse67@edu.hokudai.ac.jp
大会ウェブページ　https://jshse-taikai.jp/

［制作］株式会社コームラ
〒501-2517 岐阜県岐阜市三輪ぷりんとぴあ 3